

## 【 4 】

氏名	谷川道雄 たに かわ みち お
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第86号
学位授与の日付	昭和48年11月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	隋唐帝国形成史論

論文調査委員 (主査) 教授 佐伯 富 教授 佐藤 長 教授 小川 環樹

## 論 文 内 容 の 要 旨

隋唐帝国の歴史的格をどう理解するかはわが東洋史学界多年の懸案であるが、本論文は、このような問題の解明を目ざして、隋唐帝国の形成過程を論じたものである。

従来、隋唐帝国の性格把握はさまざまに試みられてきたが、そこにおける国家と民衆との支配関係は自明の前提として取扱われがちであり、民衆が国家を支え、またそれゆえに国家の権力支配に対抗せざるをえない、その歴史的現実については、深く問われることがなかった。本論文はそうした方法的反省に立って、隋唐帝国の本源ともいべき社会関係を、先行時代たる五胡十六国・北朝の政治過程のなかに探ろうと試みた。その結果によれば、支配者と民衆とを同時に含む共同体的集団がそれら諸国家の原形をなしており、諸王朝の歴史は、それらの集団が国家体制にまで生成発展する過程であると共に、それが解体して王朝の没落に帰結する過程でもある。かかる歴史の蓄積を通じて、次第により高次でより普遍的な共同体的関係が国家体制を支えるに至り、ついに安定的・統一的な隋唐帝国時代の出現を見る。

このような共同体的集団には、胡族の部落社会と漢人貴族指導下の郷党社会の二系統が考えられる。両者はそれぞれ歴史的変容を遂げつつ発展し、また相互に融合して普遍的な制度を形成するに至る。これが隋唐帝国の骨格をなすのである。

本論文序説「隋唐帝国の本源について——中国中世の国家と共同体——」は以上の趣旨を綜括的に述べたものであり、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの各編は、これを実証的に裏づける個別研究より成り立つ。まず第Ⅰ編「古代世界帝国の崩壊と五胡諸国家の興立」序章では、漢帝国崩壊期の異民族問題が漢的世界帝国の破綻を必然化するものとして五胡十六国時代の前提状況を述べ、つづく三つの章で、前趙・後趙（匈奴系）、前燕・後燕（鮮卑系）、前秦（氏族系）各族国家の構造を分析する。これら諸国家は、一見漢人王朝風であるが、胡族兵を主体とする国軍の兵権が宗室諸王に分与されて一種の軍事的封建制が行なわれ、その最高統領者が大单于である。この独特の軍事体制は部落連合国家時代の伝統を継承するものであり、第1章「南匈奴の自立およびその国家」、第2章「慕容国家における君権と部族制」は、趙・燕諸国家がいずれもこうし

た分権体制を軸として成立し、その解体に伴なって崩壊したことを論ずる。第3章「五胡十六国史上における苻堅の位置」では、前秦の苻堅がこのような種族血縁主義を超えた道徳主義的政治理念で普遍的国家の確立を図ったが、現実にはこれを克服しえず、国家解体に至ったことを述べる。

第Ⅱ編「北魏統一帝国の支配構造と貴族制社会」は、前編の五胡十六国的限界をのりこえて華北の統一に新段階を画した北魏国家の構造を、その政治矛盾の展開のなかで考察したものである。第1章「北魏の統一過程とその構造」では、部落連合国家として発足した拓跋政権が部落解散を断行して統一帝国へ発展し、さらに孝文帝以後門閥制国家として転身する過程を概観する。しかしその華北統一を成功にみちびいた州鎮軍は依然として胡族的軍事体制の転形に他ならず、したがって部落解散後の北魏国家といえども一個の胡族政権たるを免れないことを指摘する。かくて孝文帝のいわゆる漢化政策が従来の北魏国家体制に対する根本的変革であることが明らかとなり、そこにさまざまな矛盾の生ずることが予測されるが、これを承けて第2章「北魏官界における門閥主義と賢才主義」は、孝文帝の門閥主義的官吏登用策に反対する賢才主義的立場の理念構造を考察したもので、それが一時敗北しつつも、のち東西兩魏によって闡明・実行され、隋の科挙創設に及ぶことを展望する。第3章「北魏末の内乱と城民」は、いわゆる六鎮の乱の主体が城民なる用語で表わされていることに着目して、それが州郡民（漢族が主流）と区別された州鎮軍の専従軍戸（胡族が主流）であることを考証、さらに内乱が殆んど華北全域に及ぶ城民によって担われていることから、門閥制国家への変質のために賤民化された胡族民衆の広汎な復権運動であったとする。さらにこの内乱の史的意義はつぎのように展望される。五胡十六国以来の胡族自由民を骨幹とする兵制がこの反乱を契機に蘇生し、その自由回復の潮流を基底に北朝諸国家さらには隋唐兩帝国が構築されると（序説参照）。

第Ⅲ編「北朝後期における新旧貴族制の抗争」の各章は、右の展望を北朝後期諸国家の構造分析にもとづいて具体化したものである。第1章「北朝後期の郷兵集団」は、城民反乱に危機感を抱く漢人貴族層がその同郷民を軍団として結集した郷兵集団の構造と意義を考察したものである。郷兵集団組織の目的は貴族のヘゲモニーの下における秩序維持にあるが、しかしそのためには従来の身分的階層制を水平化するいわば開かれた貴族制の立場がとられた。貴族と郷民のこの再編された関係が、東西兩魏政権の重要な基礎の一つである。とくに西魏では郷兵結集を政策として行ない、これと胡族兵団とを一元化した府兵制が創設される。胡人部落社会と漢人郷党社会との胡漢それぞれの自由民共同体は、かくしてひとつの国家制度に練り上げられるに至る（序説参照）。しかし、第2章「北齊政治史と漢人貴族」で考察したように、東魏＝北齊朝ではこの方向は貫徹されるに至らなかった。この章は、胡漢の軍団をバックに登場した新しいタイプの武人貴族勢力が、帝権に寄生しつつ延命を策する門閥貴族勢力との相剋に敗れ、それが国軍の衰弱をもたらして北周の併呑をよぎなくされる過程を論じたものである。第3章「五胡十六国・北周における天王の称号」は、五胡の君主のなかに自遜して皇帝を称せず、姫周の制に倣って天王を称することが多かった事実を発掘し、それが当時の君主権を支える軍事的封建制によるものであったことを指摘（第Ⅰ編各章参照）、さらに北周の君主にも同様の例を見ることから、府兵制および周礼主義官制が胡族軍制への復古を志向するものであるとする。しかしまた、北周のかかる分権体制には五胡時代の血縁主義を超えた性格があり、そこに北周から隋唐に至る時代の歴史性を見る。第4章「周末・隋初の政界と新旧貴族」

は、周隋革命が皇帝の側近官僚として権勢を維持しようとする門閥貴族の自己保全運動を媒介として行なわれたこと、しかし隋文帝の初期かれらは排除され、いわゆる開皇の治は高類ら新貴族官僚によって担われたことなどを論じ、後者のなかに新時代の官人像を見ようとするものである。

以上要するに、本論文は、胡漢の民衆＝共同体成員が北魏末の内乱を直接的な契機としてより普遍的な体制の担い手に発展してゆく過程をあとづけたものであり、同時に、かかる民衆集団の人格主義的の掌握者たる貴族階級（参考論文参照）がさまざまな変容を遂げつつ、隋唐官僚群を形成してゆく経緯をとらえたものである。隋唐帝国の一見古代専制国家的相貌にもかかわらず、論者がこれを中国における中世国家の完成形態と見るゆえんである。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は著者が隋唐帝国形成の過程を政治・社会史的に把握しようとしたものである。著者によれば、隋唐帝国の基礎には、二つの共同体世界——胡族の部落共同体と漢族の郷党共同体——がある。これらは漢帝国の胎内から成長してきた二つの歴史世界であり、この両者が北魏解体後の混乱の状況の中で一つに融合して、隋唐帝国を形成したとする。

著者は歴史の発展には民衆の動向が重要な関係を有することに注目し、はじめは民衆と国家権力との対抗関係を軸に隋唐史を考察しようとした。しかし後には、それと同時に国家にはそれを支える民衆との間に、一体的連続的關係の一面もあることを反省し、かかる関係を比較的濃厚に保っている状態を隋唐以前に求めた。著者がまず着目したのは、隋唐の政治的統一の起点をなした北魏末の六鎮の反乱である。これは胡族系民衆の北魏国家に対する不満の表われであり、いわば国家と民衆との一体的關係が否定的に表現されたものと著者は考える。

従来、この反乱は、北魏孝文帝の漢化政策に対する胡族の反動としてのみ説明されていたが、著者はさらにここに城民という概念をもち来り、より広い立場から六鎮の反乱の意味を捉えようとした。城民とは一般州郡民に対する語であり、城鎮の兵戸を意味する。元来、この城民は胡族系民衆が国家の運命を双肩に荷った栄光ある自由民戦士であったのであるが、その地位が次第に低下した。ことに孝文帝の門閥主義的漢化政策の実施は、胡族間の種族的なつながりを解体させ、身分制によってこれを再編しようとしたところから、胡族民の中には、国家権力から疎外される者が生じた。六鎮軍士の賤民化はその最も著しい例である。

このように著者は、北魏末の六鎮の反乱を、単に六鎮という狭い地域に限らず、より広い城民という概念を背景にして、自由な胡族軍士の賤民化、および賤民から自由民へという志向とそれに対する行動、この二つの方面から把握しようとした。そして著者は北魏城民の喪失した自由は、部族共同体によって保証された遊牧民の自由的地位に、その来源があることを確認し、それが中原国家の歴史をくぐって制度的に構成されたものであると論証したことは、著者の新らしい見解である。

隋唐帝国の源流として、著者は胡族の部落共同体とともに、漢族貴族制下の郷党共同体をあげる。著者によれば、北朝の胡族国家は胡・漢の合作政権ではあるが、漢人貴族の胡族政権への参加は、胡族と対等のものではなかった。孝文帝の門閥主義的漢化政策は、漢人貴族の国家権力への参加を質的に深めはした

が、しかし軍事はあくまでも胡族民衆が担当していた。北魏末の反乱は、この矛盾の露呈であり、漢人貴族は危局に直面した。貴族が国家権力を自らの手で担うには、反乱への対処を通じてすべきであるとする自覚は、彼等をして自発的に郷党部隊（郷兵）を結集し、これを統率して勢力の護持をはからしめた。郷兵集団は自営農民を主たる構成要素とする共同体関係を基盤にして成立している。自営農民は召募に応ずることにより、士の身分を獲得することが可能であり、ここに漢族社会にも門閥主義的身分の固定化を打破しようとする運動がもり上ってきた。彼等は貴族精神そのものを否定するものではなく、門閥主義的閉鎖性を打破して非門閥の者にも栄進の途を開こうとする賢才主義の主張であり、これは後の科挙制にも通ずる開かれた貴族制（新貴族主義）である。この理念を現実を支えたものは北魏末のきびしい社会情勢である。それは東西両魏の反門閥主義の官吏登用方針にも反映されている。漢人貴族制は門閥主義から賢才主義へと自らを革新し、新軍閥国家の一翼を担ったのである。六朝から隋唐への過程は、従来、国家権力による貴族勢力の圧服という視角で捉えられたが、著者は視点をかえて、有力な新貴族の台頭と新旧両貴族の葛藤という立場から隋唐帝国の成立過程を考察した。これは著者の新見解である。

なお本論文には参考論文三篇を添えるが、いずれも本論の行論を補強するものである。

以上の如く、著者は隋唐帝国の成立過程を、北魏末の反乱に焦点をあてながら、二つの共同体に注目し、その発展を通して考察し、隋唐帝国を成立せしめる要素を明らかにしたことは、著者の大きな功績といわなければならない。しかしながら、以上の結論を導き出す過程において、史料の解釈にやや不充分と思われる点がないではない。例えば、北朝の天子が皇帝の称号を憚り、自ら天王と称したことを、中国の古典からのみ解釈しているが、これは当時における西来の毘沙門信仰とも関係があることをも考慮すべきではなからうか。しかし、これは瑕瑾にすぎず、これによって本論文の価値が毫も減ずるものではない。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。